

## 文化講演

## 古人の心 ― 歴史のまなざし

池田知純 (愚海)

宗教法人大興寺 代表役員  
東京慈恵会医科大学 環境保健医学教室

人も社会もそれぞれの歴史を背負って現在の姿がある。言い換えれば、意識するにせよ、しないにせよ、それぞれの歴史の制約のもとに我々の姿がある。したがって、より深く自らを知ろうとすれば、自らの依って来た所以であるそれぞれの歴史を知っておく必要がある。然るに、歴史はそれほど普遍的にあるいは客観的に把握できるものではなく、時代のパラダイムの影響を強く受ける。近代以降に限っても、少なくとも明治維新と先の大戦の敗戦という体制の大きな変化によって時代のパラダイムは大きく変わっており、その変化を認識しないで現在の価値基準で歴史を見ることは、ものごとの本質の一面的ないし浅薄な理解に繋がっていく懼れが多分にある。

そして、その影響をもっとも強く受けている分野の一つが宗教である。歴史上重要とされる人物の足跡にしても、得てして典型的に捉えられ、現代人の目から見て合理的に説明できないところは、荒唐無稽で理解不能として片付けられてしまう傾向がある。例えば、聖武天皇について、民の疲弊を顧みることなく遷都を繰り返し莫大な費用のかかる大仏の造立を強行した天皇、として否定的に評価されることが多い。しかし、それは果たして正当な評価なのであろうか。そのような行為をなすに到った精神的な背景に対する認識が欠けているのではなかろうか。

芭蕉に「古人の跡を求めず、古人の求めたる所を求めよ」という言葉がある。歴史を深く本質的なところを見つめようとするならば、ものごとの事象を知るだけでは不十分で、それを為すに至った精神を知ることが重要である。それがなくば、まさしく単にその跡をたどるだけになってしまう。もとよりその精神を知ることが容易ではないが、その手がかりとして重要なのはその人の発した言葉である。

そのようなところからみると、聖武天皇の発せられた「責めは我一人(いちにん)にあり」という言葉から

は、天皇の痛切な自責の念と仏道に帰依せんとする強い意志がうかがえる。弘法大師空海もややもすると、加持祈祷を事として天皇をはじめとする貴族に取り入った人物として捉えられがちだが、「それ仏法、遥かにあらず、心中にして即ち近し」という言葉にあるように、その心は驚くほど合理的で冷静である。西行法師にしても、伊勢神宮を訪れて「なにごとのおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼる」と素直に詠んでおられる。あるいはまた、「山川草木悉有佛性(さんせんそうもくしつうぶっしょう・自然全てが佛である)」という言葉も我々の胸にストンと落ちてくるが、これは佛教本来の教えではなく、古来からの縄文文化ないし神ながらの道の反映かもしれない。

大事なことは、このような佛教あるいは自然観を基調とした宗教観が明治に到るまで通奏低音として途切れることなく続いてきたことである。そしてそのことを示すエピソードの一つとして、勝海舟が死に臨んでいる山岡鉄舟を見舞ったときのやりとりが残されている。すなわち、もう死ぬところだ、と鉄舟が言うのに対し、海舟は「それでは宜しくご成仏あれよ」と言って帰っていったのである。この見事としか言いようのない対応は蓋しその背景に佛教を基調とした死生観が核として横たわっていたがためであろうと考えてもそう大きな間違いはなかろうと思われる。

翻って、現代はいかがであらうか。果たして納得のいく死生観というものが社会に共有されているのであろうか。このことは特に終末医療を考えるときに重要であり、死生観のない医療というのは見方によっては醜悪でさえある。